

「仁者其言也訥」じん

露 木 清

「学問の峻厳性と、社会対自己の正常な結びつきこそ一橋生活の賜物である。権力と利益に屈せず、私は彼を守り、之に殉ずるであらう」これは学生大平正芳が卒業アルバムアルバムの写真の側に副えた旅立ちの詞である。

東京商科大学昭和十一年卒業二五八名のアルバムアルバムの巻頭には、学長三浦新七教授の「巣立ち行く者へ」の誨おしえが端正な哲人学長の写真とともに飾られている。

人の一生を旅と観した芭蕉も奥の細道踏分けむ門出に前途三千里のおもひに離別の泪を灑いだといふ。滞留六年の学園を巣立せんとする諸氏は全心青雲の志に燃えて淡い惜別の情すら意識せぬとしても、前途に対する一沫の不気味さが緊張焦慮の気分の底に潜んでぬとは誰かいひ得よう。言ひ古した詞ではあるが、人生は千古の謎である。謎なればこそ是を解かんず勇猛心も発生す可く、苦しい間の楽しみも味い得るであらう。門出の今は若い企志で青春を語る可きで蹉跎たる老人の繰言を聞く時ではない。強てとならば、吾は只「居之無倦、行之以忠」の古語を引いて口ゴスを「行為」と訳したファウストの決心を学べといはむ。

三浦新七

官吏を志して高等文官試験を受けたための勉強上、大学の近くにと国分寺駅近い高台の家に下宿していた大平と、大学三年をともに過ごした。黙々と勉強していた彼とは、朝な夕なな食事の折、顔を合わせたゼミナルが異なると行動をとにもすることはない。二・二六事件の最中に大学最終試験を終えた後の一夕、次第に高まりゆく軍靴のひびきと言論の流れの歪みのうちに、底知れぬ不気味さを予知しつつ、少しでも自由な民主社会を保持

し得るは、われわれを置いてなきものと彼我ともどもに語り合つたことが脳裡にのこるのみ。

卒業後彼は志望通り大蔵官吏、私は三菱銀行員。満州、アメリカと日本を離れたこともあり、暫し交友も杜絶、戦後復員後、職域柄、学友関係上、種々の会合にともども出席する機会も増した。池田首相の秘書官時代より始まり外務大臣、大蔵大臣になるに及んでも、気のおけない学友として意見を交したり頼みごともしてきたが、無理を強いるがときは一度もなく、村夫子的態度と友情とは野にあっても朝にあってもかわることは全くない。

外務大臣になつてから彼の口は重くなつた。「もう少し話したらどうかな」との言に、外交はまことに微妙、重要、言葉を選ばぬとんだ誤解や影響を生む。慎重にこしたことはないとして、これを守り続けた。「居之無倦、行之以忠」の学長の引いた論語の誨を守り通した大平。この論語の行の次に「仁者其言也訥（口が重い）、之を為すに難ければ之を言うに訥無きを得ん乎」とある。正に大平の真髓を語りて妙といふべく、大政治家たるとともに孔子の説く仁者でもあつた。

大蔵大臣当時、割引国債発行に当たり、銀行定期、郵貯、割引債の課税不正問題にふれた折、「余りにも厳正公平を求めての論議は国民総背番号制に追い込むおそれなしとせず、個人の資産その他が一握りの部署に握られる社会体制は、自由な社会生活のゆとりを失ふことにながりがかねない。自分はそういうことは好まない。脱税でなく、ひそやかなへそくりをする楽しみとゆとりを保つ社会が好ましい」と訥々と説いていた大蔵大平の姿が鮮かに想記される。自由主義を信奉し、権力と利益に屈せず、人を愛し、国政に殉じた総理大平。若き日の志を貫き人生信条を最後まで守り通した大平。学友として誇り、これに過ぐるものはない。

されど何としても死を急ぎ過ぎた。その後の世界情勢の変化、国内事情の推移に照し、生きていてくれたらなあ、としみじみ思い、残念無念の情はいやつこののみ。

(伊勢丹会長)